

琉球大学学術リポジトリ

シリングル盟の夏 ―モンゴルの民族誌的研究―

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学教育学部 公開日: 2010-10-13 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 辻, 雄二, Tsuji, Yuji メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/18248

シリングル盟の夏 —モンゴルの民俗誌的研究—

辻 雄 二

Yuji TSUJI

はじめに

アジア大陸の中央に位置する三日月然としたバイカル湖。その南に広がる高原地帯を中心に、「遊牧の民」「チンギス・ハーンの末裔」と呼ばれるモンゴル人の多くが生活する。

「天は蒼蒼、野は茫茫、風吹きて草低く、牛馬に見ゆ」と謡われたモンゴルに生活する牧民は、伝統的な生産手段としての牧畜を行い、民俗文化に多くの特徴を有している。

毎年陰暦八月二八日を期して白馬の乳を地上と空中に散布し、もろもろの精霊に供養されよ。精霊にこの馬乳を供養さえすれば、彼らはきっとカーンの所有するすべてのもの、すなわち男女を問わずいっさいの人間・家畜・鳥獣・穀物そのほかあらゆるものを保護するであろう。

マルコ・ポーロ著 愛宕松男訳注『東方見聞録 I』（東洋文庫158平凡社 1970年）

本稿でとりあげるモンゴル社会とは、中華人民共和国の内モンゴル自治区シリングル盟に生きるモンゴル民族のそれである。モンゴル民族は部族によって大きくは、ハルハ、ブリアート、チャハル、オイラトの四つに分かれる。その居住地を国家単位でみると、モンゴル、ロシア、そして中華人民共和国の三つに分散し、中でもモンゴルは220万人を超えるモンゴル民族が住み、他の二国でいずれも「少数民族」とされるのと異なり、内外の人々にとってその中心的な存在を占めると意識されている⁽¹⁾。しかし人口でみると、中華人民共和国の内モンゴル自治区では338万人余のモンゴル民族を数え、その実数では最も多数のモンゴル民族が生活を営んでいる。にもかかわらずモンゴル民族の

精神的支柱をモンゴルに譲っているかのように思われるのは、やはり内モンゴル自治区において、モンゴル民族の占める割合が15.7パーセントにすぎず、さらに現在の中華人民共和国が改革・開放政策をとる中で、市場経済への志向を強めており、モンゴル民族の生活および文化を取り巻く状況が大きく変化しようとしているからであろうか。いずれにせよ内モンゴル自治区では漢民族との混住が進み、その生活様式は大きく影響され、もはやモンゴル語も学校教育の中で習得するという、いわば生活言語でなくなる傾向が広がりつつあるという現況からすれば、それも無理からぬことと言えよう。しかしこのような「国家意識」が優先される中においても、中華人民共和国内モンゴル自治区シリングル盟は、草原地帯という地理的・自然的条件により牧畜生活を営むモンゴル民族が多く、生活圏も漢民族との混住が比較的少ないという理由から本研究の調査地とした。

内モンゴル自治区は中国の総面積の8分の1に当たり、そのおよそ2分の1が草原地帯である。またモンゴル民族は、中国においては内モンゴル自治区を初め、西は甘肅省（肅北）、青海省（河南）、新疆ウイグル自治区（和布克賽爾）、東は黒龍江省（杜爾伯特）、吉林省（前郭爾羅斯）、遼寧省（阜新）、など広範な地域に生活している。多くはモンゴル族自治県や自治州とされ定住集落を形成し、およそ総数350万人とされる⁽²⁾。

そして中国の歴史的展開においては、モンゴル民族のみならず広大なアジアの大地を駆けめぐる者達に脅威を覚え続けていたのが漢民族であり、その脅威を与え続ける者達の有り様を記録したのが司馬遷である。司馬遷はその書『史記』の「匈奴列伝」において次のように記している。

彼等は畜類を牧するために転移する。その

家畜で多いのは馬・牛・羊であり(中略)水と草とをもとめて転々と移動し、城郭や常驻地はなく、農耕もおこわない。しかしやはりめいめい分有地をもっている。文書はなく、言葉をもってお互いの約束とする。(中略)その風俗は、平和の時は家畜にしたがって移動し、鳥や獣を射猟して生業とするので、一旦急変あるときは、人々は攻戦になれており、侵入して攻め立てる。これが天性である。(中略)毎年正月、これら諸長は単于庭に小集会をして祀をし、五月には籠城に大集会して、その先祖、天地、鬼神を祭る。秋、馬肥ゆるとき蹄林にて大会し、人畜の数量をとりしらべる。

〔内田吟風・田村実造編『騎馬民族史—正史北狄伝』平凡社東洋文庫 1971〕

このように漢字史料はもとより、モンゴル民族の生活文化を書き留める多くの文字史料が今日に伝えられてきたことは言うまでもない。

そのモンゴル民族の民俗文化について、本稿では内蒙古自治区シリングル盟アルチェンボラグスムに住む牧民の日々の営みを通して、その生活文化の枠組みを民俗誌的記述によって著すことを目的とする。それは日々の営みの場から一定の人々に共有される考え方の枠組みや行動規範を個人の語りと観察によって照射するものである。はじめに調査地の概観について、その地域の景観と歴史的展開、自然環境を中心に報告し、そして具体的には調査者である筆者が向き合った馬飼いの一家を対象とし、その目に映った営みの様子からその民俗社会を描くこととする。

【註】

- (1) モンゴル国の首都ウランバートルで、1993年9月13日「世界モンゴル族大会」が開催された(朝日新聞 1993年9月14日付)。「大会には民族服に身を包んだオルチバト大統領らが出席。ジンギスカンの生まれた故郷に帰ってきたモンゴル族を歓迎するとともに、世界のモンゴル族の団結と協力を訴えた」との報告があるように、モンゴル族の先祖・ジンギスカンの生まれ故郷モンゴル国がその精神的支柱の役割を果たしている。さらに参加者は「ロシアのブリヤート、

トーフ各共和国から公式代表団が参加したのをはじめ、米、仏、インド、ネパール、台湾などから各地のモンゴル族組織の代表が参加した。微妙な関係にある中国の内モンゴル自治区からは正式代表団は来ず、個人の代表が参加した」とある。トーフ共和国は1911年モンゴルからロシアに併合され、民族および言語系としてはテュルク系と考えられているにもかかわらず、そこに住む人々のはかつての支配者モンゴルに帰属意識をもっていることが伺われる。これからも明らかかなように、民族意識とは一面において歴史の産物といえる。

- (3) 中国においてモンゴル民族のような少数民族の自治地域は、現在の行政上では自治区、自治州、自治県(旗)の三段階に分かれる。自治区は行政単位の省に相当し、自治州が自治区と自治権県の間位置する。同じ多民族国家であった旧ソ連が「民族自治共和国」の連邦制であったのに対し、中国は「民族区域自治」制度の共和国である。

- (2) 原山煌は『史記』の名声を高めたのは「列伝」であるとし、その一つとしてこの「匈奴列伝」をあげている(原山 1995 15-19頁)。果たしてこの匈奴がモンゴルの祖先であるのかどうか、モンゴル民族の成立とも関わり重要なポイントとなるが、原山もこの点については慎重な姿勢をとっており、他にも様々な論がだされ意見の分かれるところとなっている。ここでは「華夷思想」を持つ中国が脅威を覚える北の大地を居とする集団を「匈奴」と呼び、その匈奴は巧みに馬を操る戦闘能力の高い者達であったという以上の説明をする論拠をもたない。しかし漢民族がその後の歴史の中でモンゴル族を含む騎馬民族を描写するするに際し、この司馬遷の記録が参考にされてきたことを考えると、他者の記憶に形成されたモンゴル民族の姿という意味において貴重な記録と考える。

- (3) 調査時に語られる言葉を表記する際に、その語りの世界を描くに必要と考えた言葉に限ってカタカナ表記とし、()内にその意味内容を記した。この場合カタカナ表記が語られるモンゴル語の発音に対し正確であるとは言い難く、基本的に先行研究のそれに倣いつつ、筆者の責

任において表記を行うこととした。また、引用した文字資料については、原則として原文にしたがうこととする。それは仮に明らかな不適切表現であったとしても、現在の視点と価値によって修正を行うことは、結果としてその実態を歪め、事実を正しく捉える上で弊害をもたらすと考え、原文を尊重する意味も含めそのままとする。

1. 風吹きて草低く、牛馬に見ゆ — 調査地概観 —

天高く、遙か彼方を千切れた白雲が流れいく。ボルジョマル（雲雀）の囀りが、吹き荒ぶ風のかき消される。その下に青々と光り輝く草地在り広がる。ふりそそぐ目映いばかりの陽光に青草は強い薫りを放ち、なだらかに続く丘陵には牛馬の姿が点々と望まれ、稜線には石積みされたオボが屹立する。モンゴル草原の八月の風景である。

ここに記述するシリングル盟シリンホト市アルチェンボラグスム⁽¹⁾は、北京市の北およそ700キロメートルのところに位置する。シリングル盟は二つの市と九つの旗、一つの県からなり、総人口23万人余のうち30%を超える7.7万人が、盟の行政公署が置かれるシリンホト市に集中している⁽²⁾。市域は18,753平方キロメートルで、その内80%を草原が占め、モンゴル語で「高原の城」という名の通り、草原の中央に浮かぶ城郭都市である。その都市を取り囲む広大な草原では民族を問わず、総人口の20%を超える人々が牧畜を営んでいる⁽³⁾。

北京市からシリンホト市までは、直通バスと週1便の小型旅客機が運航している。すでに河北省と接する太僕寺旗や正藍白旗までは、住民人口の70%を漢民族が占め、もはや漢民族とモンゴル民族の混成社会というよりは、漢民族社会といった方が適切であろう。そして街でもモンゴル文字の看板を見ることもなく、学校教育もすべて漢民族社会のそれと同様に、「国語」である漢語によって行われている。農作物も穀物を中心に、草原では目にすることのない葉野菜なども栽培され、夏にはその地に咲き乱れるアブラナの花蜜を求めて養蜂を営む者もやってくる。

その景観もハンチェンダク砂漠をすぎると一変し、駱駝や牛、馬、羊などの家畜が飼育されている様子が多く見られるようになり、自然的・地理的環境はもとより生業形態も人々の生活様式も大きく異なっている。そして砂漠の先にある小高い平頂山を越えるとシリンホト市街が一望され、舗装路で30キロメートルの距離となる。シリンホト市（アバガナル旗：俗に貝子旗と称する）には貝子廟があり、その南の正藍旗には元上都城遺址がある。1256年に造営された1辺2200mの巨大な城郭都市跡で、かつて開平府と言われたが、後に上都と変更したものである。至る所にモンゴル文字と漢字が並記された看板の掛かる市街地を抜けると、ポプラ並木の続く道の両側で羊や牛が草を喰む姿が見られ、ここがモンゴル民族の生活する草原地帯の入り口であることを教えてくれる。やがて舗装路から脇に逸れると、どこまでも交わることのない二条の轍が草原へと延々と続く。その轍の先にアルチェンボラグはある。

シリングル盟シリンホト市アルチェンボラグは、シリンホト市街地の北、約90キロほどに位置するスム（部落）である。その名の起こりは温泉の湧きで土地であったが故という。面積は2,108平方キロメートル、そのうち牧場となる草地在り1,308平方キロメートルとなっている。現在は四つの行政村と五つの自然村からなり、336戸1,259人が生活する。その内訳をみるとモンゴル民族が1,086人で、次いで漢族が92人、回族が51人、満族が30人となっている。そしてその70%以上が主産業として牧畜を営んでいる⁽⁴⁾。

もとはアユグハイスムといい、アバガ左旗に属していた。1949年以降、中部連合旗と改称し、58年に編成された生産大隊の時に今の名が定められ、三つの生産小隊に分かれていた。そして61年にはアルチェンボラグ人民公社となり、63年にはアバハナル旗に属し現在の行政区画となり、83年にシリンホト市の建制によって今日に至る⁽⁵⁾。

アルチェンボラグは平均海拔が1,150メートルで、なだらかな傾斜面の続く丘陵地帯である。平均気温は摂氏3℃、無霜期間は120日、年平均降水量が300ミリという自然環境である。経済状況は牧畜を主産業とし、飼育飼料や畜産品加工も増加傾向にあり、現在アルチェンボラグでは大小合

わせて95,511頭の家畜が飼育されている。モンゴルではタブンホショーマル（五畜）といい、馬・羊・牛・山羊・駱駝が飼育の対象とされ、なかでも馬は生活の原資を提供するのみならず、牧民を背に乗せ移動手段とされてきた。特に夏から秋にかけて造られる馬乳酒は、この期間の重要な飲料となり、その毛や皮も楽器の弦や太鼓の皮に用いられるなど、モンゴル人は馬に対して特別な愛着をもっている。そして他の家畜と大きく異なる点は、愛馬の埋葬だけはその仕方に決まりがあり、頭部を切り取り丘陵の南斜面に埋葬し、これをモリオボ（馬オボ）と呼び、祭祀の対象とするところである。このようにモンゴルにおいて人と馬の歴史は古く、そして深い関わりをもってきた。

次いで羊も肉や毛皮など生活の原資として乳・肉・毛・皮すべてが用いられる。特に家畜の中でも中心をなし、マル（家畜、財産）の多寡を表す基準とされるなど、家畜としての歴史の長さを物語っている。牛は飼育に豊富な水を要し、従って飼育頭数に限りがあるとされる。しかし多くの乳製品を必要とするモンゴルの生活には、極めて重要な食料源とされてきた。山羊は本来高山地帯に棲息するが、その性質から羊の群を管理するにあたって人間の補助的役割を長く果たしてきたという。諺に「百頭の牝山羊に六十頭の牡山羊」とあり、いわば日本の「船頭多くして船山に上がる」というような意味で、牡山羊の一頭で牝山羊70頭余りを支配することが可能という習性から、羊群の管理という役目が与えられた。駱駝はかつてモンゴル軍が西夏遠征の後に連れ帰り、以後飼育が行われるようになったという。甘粛省や青海省のモンゴル自治県をはじめ、各地で駱駝が食肉とされるが、基本的には移動運搬手段とされることが多い。

また犬は生産面においては原資とされることはないため家畜ではないが、狩猟あるいは家畜の保護において重要な役割を果たすため、各戸で数匹飼われている。すでに狼などの減少によって家畜を守る役目は失ったかに思われるが、今も家の前を走り行く車に向かって猛り狂ったように吠えかかり跳びかかってくる様は、かつての使命を認識するに十分な偉容であり、文字通り優秀な番犬としての役割を今も果たしている。そして慣用句と

して今も使われる「犬と狼になる」（犬狼の仲）という言葉が、そのかつての役目を今に伝えている。

【註】

- (1) 元朝以来、時の統治者が領地、官爵を与える法がとられ、それぞれの氏族や部族の長が貴族的封建領主の身分を備え、さまざまな特権を有し土地分配などがなされてきた。したがって多くのハラチオ（牧民）は彼らに従属し、定まった領地に縛り付けられ、兵役を科せられてきたのである。このように盟旗制度の存在は封建的勢力の持続に意味をなし、現在も行政的単位として機能しているのである。スムという言葉も現在は行政の一単位を表す言葉となったが、その原義はラマ廟のことで、スムの説明を求めればかつてこの地にあったラマ廟の話が必ずでくる。文化大革命時に破壊され消失したラマ廟もまた、人々の記憶にしっかりと刻み込まれているのである。
- (2) モンゴルの盟旗制度は、清朝においてモンゴル地区を直接統治するための政治制度であり、そのための具体的な方策とされた。それは1638年「蒙古衙門」から改められた「理藩院」で制定された『理藩院則例』の主要な内容とされていた。その目的とするところはモンゴル封建主の権利についての制約であった。すでにこの頃のモンゴル社会は、伝統的な生産手段であった牧畜も家族単位では行われるものではなく、氏族あるいは部族単位で行う集団的遊牧の形態がとられていた。そして現在はアイル（世帯）を基本にホト（設営集団）が形成され、その集合によってスム（ムラ）となり、その上位に於かれるホショー（旗）を束ねるのがアイマク（盟）となっている。特に清末以降の社会組織の歴史的展開については小貫が詳細に述べている（小貫 1985 65-74頁）。そして1947年5月1日、内蒙古自治区が正式に成立し、それまでの盟旗制度は撤廃された。しかし、モンゴルの習慣上その名称は残り、盟は地区、旗は県に当たり、今に至る。
- (3) 『錫林浩特市地名志』（錫林浩特市地名委員会編 1996年）による。

- (4) 『錫林郭勒統計年鑑』(錫林郭勒盟統計局編) は、毎年各種統計が編集され、ここでは1990-96年にかけてのものを参考とした。
- (5) 『察哈尔蒙古族史話』(錫林郭勒盟政協文史資料工作委員會・烏蘭察布盟政協文史資料工作委員會編 1989) 及び『錫林浩特市地名志』(錫林浩特市地名委員會編 1996年) による。

2. 馬飼いの一日

大地が太陽に照らし出された頃、煮えたぎった釜の中で磚茶を削りだした茶葉が沸き立ち、芳ばしい香りがゲルに満ちる。いつもの朝の始まりである。茶葉の出廻りを掬い取ると柄杓一杯の牛乳を足し、そこに一握りのボター(粟)が投げ込まれ、スーティチャイ(牛乳茶)は出来上がる。碗の底に沈むボターといっしょに、表面に浮かぶ脂を啜る。そして前夜に食べ残した骨付き羊肉を、銘々がホトガ(モンゴル刀)で刮きながら噛みしめる。口中に脂が広がり、それがやがて全身にいきわると、朝餉は終わる。そして伝承によれば人語を操る鳥がやってきて吉凶を伝えるところとされ、またシディキュル(鬼)が入り込んで人の魂を奪うと言うトーノ(天窓)から朝日が射し込み始めた時、主は席をたってゲルの外へでた。

馬飼いを営むこの家には、3年前に建てられた煉瓦造りの家屋とゲルがある。家屋には乳製品が保管される小部屋と寝台の置かれる二間があり、そこが主夫妻の寝室となっている。その西側に隣接するゲルは直径4メートル程で毛氈で覆われている。そこでは結婚前の弟と主の子供達3人が寝起きをしている⁽¹⁾。さらにその西側には、円形にコンクリートが施されたゲルの床基礎が造られている。弟が結婚した時には、そこに新居となる新しいゲルを建てる予定だという。併せてここが一家の宿营地となっており、煉瓦家屋の裏に置かれる、今は使われることなくなった車輪の大きな荷車だけが、かつての遊牧生活を彷彿させる⁽²⁾。

ゲルの南側に拵えられた入口は、およそ縦1メートル横80センチメートルの木枠で造られ、そこを入ると土間が広がっている。すぐ右手には土竈が作られ、脇に燃料となるアラガル(乾燥牛糞)が

籠に堆く積まれている。壁には炊事道具が吊さげられ、その横には草原を駆ける馬の図柄が施された食器棚が置かれている。そして円を描く室内の半分が板敷きの床で、その上に絨毯が敷き詰められ、弟が入り口の左に寝起きし、次男がその横に座を占めている。長男はホイモル(正席)と呼ばれる正面にあり、このゲルにおける立場を示している。そして娘が竈に近い右側にと、それぞれ秩序をもって座の指定がなされている。その年は主の甥の一人もやってきて、弟と息子の間に座を占め暮らしている。ゲルの天井中央部には、天界からやってくるものすべての出入口と考えられている丸いトーノ(天窓)があり、採光の役目を果たす。そして子供達の手首に腕時計が巻かれるまでは、そこから射し込む光の移ろいで時を移ろいを計ったという。その真下に施されたトルガ(五徳)にむけて、招福のためのチャクタガ(紐)が吊り下がっている。主はそれを「外からの縁起物はチャクタガを伝わり来るからだ」とにこやかに説くが、実際には強風の時にゲルが吹き飛ばされぬようトルガへと括りつける機能をもつものだという。

男達は朝餉を済ませた主に続いてゲルの外に出ると馬柵へと向かう。朝陽に照らし出された馬柵の中では数十頭のモンゴル馬が駆け回っている。モンゴルには家畜の数を指差しながら数えてはならないという不文律がある。たとえ声に出して数えるだけであってもテングリ(天神)の禁忌に触れるとされる。天の災いを何よりも畏れる彼等はそれを信じて、決して数えることはしない。そもそも彼等にはアトー(馬群)を一目見ただけでその数が勘定できるという能力がある。これもまた彼等に天から授けられた賦なのだという⁽³⁾。

さっそく柵を跨ぎ越えた弟が手にした3メートル程のオールガ(捕竿)の先には革紐でできた輪が作られ、その輪を駆け回る牡馬の首を目がけ掛けていく。彼が最初に目をつけたのは、アズラガ(種牡馬)であった。アズラガはいわば馬群のリーダーであり、ここでは唯一の未去勢馬である。したがってここで飼われる牝馬16頭に種付けできるのは、この一頭だけである。他の馬に比して一際太い首と四肢の肉が盛り上がっており、その目つきすら他の馬とは異なって見える。馬が一斉に駆け回る中央にあって、アズラガの首に狙いを定め

る弟の姿は真剣そのものである。中には首に輪をかけられても尚暴れ回る馬もいるが、ほとんどはオールガを手繰られ鬣を掴まれると大人しくなる。しかし、ことアズラガに限ってはそのようなことはなく、時には人間に噛みつくほどの気性の荒さである。結局幾度か試みられた後、この日最初に捕獲された馬は他の馬で、順に柵の外に連れ出されていった。途中アズラガは自ら柵を出て、数百メートル先に駆けていった。その後ろ姿に縋るように馬に跨った子供達と犬が従い、他の馬たちも解き放たれたように放牧場へと向かっていった。砂煙を巻き上げ駆けていく馬の一群は光り輝き、やがてその光が視界から姿を消していった。

続いて主が馬小屋からこの春に生まれた五頭の仔馬を、家の南前面にあるウヤー（搾乳場）に連れだし、二本の杭に架けられたゼル（縄）へ括りつけた。ゼルは高さ1.5メートル程の杭二本に渡された縄で、仔馬の長めの手綱をその縄に結わえる。これは母馬が仔馬の傍を離れぬという習性を利用した管理術によるものである。仔馬の後をついてきた母馬は草を食みながら仔馬に寄り添い乳を飲ませていた。そこに赤布を頭に巻き付け、浅葱色のデール（モンゴル服）に着替えた妻が桶を手にしてやってきた。ほんの一時母馬の乳を飲んでいた仔馬が引き離されると、仔馬の反対側から乳房に手を伸ばした妻の手によって馬乳が調子よく搾られていく⁽⁴⁾。仔馬の傍には介添えとして主人がつき、母馬の腹をさすりながら時折「グレーグレー」と仔馬の鳴き声を真似ている。間断なくほとばしる馬乳はシュッシュツツという音とともに桶に溜まっていった。

搾乳された馬乳は移動生活をしていた頃から使っている木樽に貯められ、新たに足すごとに攪拌する。「どれも俺より長生きだ」と主が誇らしげに話す木樽は全部で5つあり、陽の当たらぬ部屋の北側に置かれている。それぞれ幾つもの乳製品を造る原材料とされるが、中でも主が真っ先に指差す樽には、アイラグ（馬乳酒）が仕込まれている⁽⁵⁾。底に僅かばかりのアイラグが残る樽に新鮮な馬乳を足して攪拌し続けると1週間ほどで飲み頃となるという。「これさえ飲んでいれば健康になる。特に内臓には最高だ。」と、柄杓で汲み取ったアイラグからは、酸味の利いた仄かな

香りが立ち上がった。この香りが鼻を突くほどになると、アイラグは飲み頃になるという。

朝の乳搾りが終わると上っ張りに来ていたデールを脱ぎ、妻は竈の前に立った。竈には煮詰められたチャガントス（白いバター）の大鍋が掛けられ、傍らの娘にあれこれと指示をしながら、一時も手を休めることなく、すっかりとろみを増したチャガントスを掻き回しつづける。娘はすでに凝固したチャガントスを型入れして圧搾したものを、ボルガス（柳）の細枝で編まれた平たい竈に並べて、ホロート（乾酪）作りの準備をしていた。数日天日に晒して乾燥させると出来上がる真っ白なホロートは、指でつまむと砕けてしまうほど柔らかで、口に放り込むとサッと溶け、甘い酸味が広がる。

女達が忙しく立ち働くその時、何処からともなくホロートを好物とするシャーチャガイ（鶺鴒）がやってきた。女たちは手を打ち「ホーイ ホーイ」とそれを懸命に追い払うが、大切な食料を盗むシャーチャガイであろうと、この母子はそれを打つような無益な殺生を決してしない。その慈悲深い草原の人々の心を見抜いたかのように、シャーチャガイは一時羽ばたき飛び退きはするものの、カチカチと囁りを繰り返し隙を狙って再びやってくる。

そして女達のもう一つの仕事は水汲みである。夏は5日に一度、10数キロメートル先の泉まで、牛に曳かせた荷車に桶を積んで歩いて水を汲みに行く。行き帰りで半日仕事となる。しかし、水汲みが女の仕事になってる草原では、水汲み場で交わされる女同士の情報交換が楽しみにもなっているという。

このように繰り返される搾乳の終了によって、仔馬たちの受難の日々は終わり、それはモンゴルに秋の訪れを告げる時でもある。そして神に豊饒を感謝し、アイラグを天地の神々に向け撒き散らすのである。そんな秋の一日、3歳になった仔馬たちは大いなる苦しみを味わうのである。

朝のうち放牧に出ていた馬たちが、いつもより早く昼頃には戻ってきた。モンゴル馬はサラブレッドやアラブ種の馬に比べ、一回りは小さい体軀で、大きめの頭と太い腹を支える足は短めで遅い。モンゴルの競馬が数十キロに及ぶ長駆を競うのも、

何より馬の体力と持久力が重要視されるからで、見場の良くないその姿形こそ、モンゴル馬の優れた特徴を現している。

馬柵の前に群れる馬たちのヘーレ（灰色）、オラーン（赤色）、ハラ（黒色）といった多彩なヂュス（毛色）が秋の陽光に光り輝いている⁽⁶⁾。どれも艶やかな毛並みで見事に長い鬣をもち、荒々しく鼻をならし、時に大地を蹴って高く躍動する姿は、今にも天に向かって飛翔せんばかりである。

草地の切れた広場にはトルガが据えられ、アラガルが青い焰を立てて盛んに燃えている。スムからやって来る役人が到着すると、臀部にタマガ（刻印）のついていない3歳駒が次々とオールガで捕らえられていく。息子達が嘶きもがき続ける馬の尻尾を懸命につかんで五徳の前に引きずりだすと、手早く後ろ足に革紐が架けられ引き倒された。主人が火の中で焼けたタマガを手近づき訪れる静寂の後、一気に馬の右尻にタマガを押しつけた。紫色の煙が立ち上り、とたんに鼻をつくような毛の焼け焦げる臭気があたり立ちこめる。馬は血走った眼で歯噛みをし、四肢を懸命に突っ張っている。時間にして数秒という短いながらも地獄の責め苦から解放された馬の尻にはこの家の印である〇に十文字が烙印されていた。見る者が固唾を飲み込みじっと見守るようなこの光景も、子供達にはとっては顔をしかめるところか、どこか楽しそうにすら見える。

今のように個人の家単位で生産請負制が始められるまでは、管理を委ねられた馬も数百頭を数え、半日ばかりで行われたこの作業も、今は1時間足らずで終了する。役人はこの作業の一部始終を見た後、馬の総数を確認する。モンゴル民族である役人のそれは、やはり天賦の才に恵まれるが故に馬群を一目見て終わりとなる。かつてはこの刻印を打つ作業には二つの意味があったという。一つは馬の帰属を明らかにすることで、一つが税の徴収を目的にすることである。この方法は所有する家畜の頭数によって税の徴収が行われていた王府の頃からのもので、その時々行政役所単位で行われていた。そしてかつてはアイルごとに税が取り決められ、ほとんどが家畜によって納められたという。時に羊皮や牛皮などの供出もあり、その際には土地の王府から代価としてチャース（紙幣）

が支払われたという。現在は家畜頭数を確認する以外の目的はないという。

ゲルに戻ってアイラグが振る舞われると、「どこそこのアイルの誰その羊がよかった」「誰その息子が嫁を迎えるのにいくらかかった」と一頻り世間話に花が咲き、シュル（羊肉饅頭）を食べ終えると役人達は引き上げっていった。今や草原に生きる牧民の生活にも、携帯電話が普及する時代である。しかし今も昔と変わらず口伝えによる情報が草原を駆けめぐることには変わりはない。

午後の陽射しは真夏のそれに比べ幾分か弱まり、先ほどの臭気が消えた草原には、青草のいきれがむんむんと漂っていた。絶えず優しく吹き付ける涼風が、ほんのりと汗ばんだ肌着を通し、爽やかな気持ちにさせていた。

彼等一家の暮らす場所から右前方を眺めると、なだらかな起伏が続く丘陵はホゼル（ソーグ）地帯で、所々にホゼルが浮き出し白い地面が浮き出て、そこに点々と牛の散った景観は、ちょうど雀の斑点のように見えた⁽⁷⁾。そして遠くは薄くぼんやりと霞んで見える緩やかな丘陵のうねりに沿って、延々と石積みが施されており、その広大な大地がこの一家の放牧地であることを示している⁽⁸⁾。

そこに放牧にだされている牛は、今年仔を産まなかった牝牛と2歳以上の去勢された牡牛だけである⁽⁹⁾。この家では牡牛は肉が固くなる5歳までに、また牝牛は3年たって出産しなければ、いずれも売ってしまう。そして毎年冬の支度が始まる頃、牛一頭と羊三匹を潰し、冬の間一家の食料にされる。牛は肉や内臓は細切りにして保存に耐えるよう木にかけて乾燥させる。血は桶にとられ、ゼラチン状にしたまま保存される。羊の場合もほぼ同様であるが、牛のように細切りの肉にはせず、体の部位ごとに固まりのまま塩ゆでにして保存するという。

夏の夕暮れ時、やがて沈みかけようとする真っ赤な太陽は、草原を眩いばかりに輝かせている。澄み切って乾いた夕暮れの気には、日中の蒸せるような暑さは最早微塵もない。闇と冷やかな気が辺りを包み込む中、何頭かの牛たちが水飲み場へ向かっていた。

【註】

- (1) 中国における現在の人口統制下では、草原に暮らすモンゴル民族には子供を3人までの出産が認められている。
- (2) この荷車は主人の父親の代から使っていたといい、この地に定住するようになってからも乳製品を街に運ぶ際には利用していたが、現在は運送を生業とする者がトラックでやって来るため利用されなくなった。
- (3) 馬の売買は春から夏にかけて行われ、この時にいた馬は秋から来春にかけて飼育する馬であった。その数は、天賦の才に恵まれない筆者がカメラの静止画像を使って数えたところ、全部で53頭であった。この規模はこの地域でも中規模のものである。そして一目で馬の数を勘定する才能とは、何等分かの一に当たる馬群の数を瞬時に判断し、その一つの馬群に何頭の馬がいるかを勘定することであるという。
- (4) 馬は交尾期が人間の手によらず、春先に子馬が生まれた時にのみ搾乳はおこなわれる。特に馬乳は長期保存にはむかず、7月から8月にかけて搾乳される。したがって一頭の馬からは一度に200ccから300ccの馬乳が採られ、一日に4回から5回搾乳される。
- (5) モンゴルでは鮮乳を加熱して上層にできる脂肪膜をウルム（クリームチーズ）、残った乳を攪拌して分離した上層をシャルトス（バターオイル）、さらに煮詰めるとチャガントス（白いバター）ができる。他にも加熱して凝固したものを、型入れて压榨したものを天日で乾燥させてできるホロート（乾酪）。加熱せずに自然に油分と分離した残りを型入れて压榨してできるヒヤスラグ（湿酪）。乳酸菌を足すことでできるタラグ（ヨーグルト）などがある。こうして作られる乳製品のほとんどが貯蔵食品として、モンゴルの一年の食生活を支えるのである。
- (6) 他にもシアラ（黄色）、フルン（赤褐色）、チャガン（白色）などの毛色があり、このように馬に関する語彙がモンゴルにおいて豊富であることから、人々と馬の関係の深さが理解される。馬の呼び名及び毛色についてはモンゴル国の報告ではあるが野沢が丹念な調査の結果をまとめている（野沢 1991）。さらにこの牧民の家では直接見ることはできなかった去勢についても三歳駒に施される。モンゴルにおける家畜の去勢の意味・方法については小長谷に詳しい報告がある（小長谷 1996）。
- (7) ここでは主人夫婦とその家族、そして嫁を迎えていない弟で一つのアイル（世帯）を成している。かつては叔父家族一家もゲルを並べ暮らしていたが、現在は息子達ともどもシリンホト市内のマンションへと引っ越し、結果として広大な放牧地を有することになったという。もともと主は男2人女4人の兄弟姉妹で、一番上の姉は最初に嫁いだ相手が国共内戦の時にハルハ（現モンゴル国）に行き、その後戻って来なかったために再婚し、現在はスム役所近くに住む牧民の元へ再婚して嫁いでいる。二番目の姉は隣のホトの牧民に嫁ぎ、今も家畜の去勢や出産など共同作業が必要な時にはやって来る。三番目がこの主人で、四番目の妹は幼少の頃に亡くなっている。五番目の妹は幼い頃子供のいない家庭に養女にだされ、現在は特につきあいはないという。そして六番目が弟で、同じホトアイルを形成している。
- (8) 石垣で囲まれた広大な放牧地と、居住するゲル、そしてその横に建つ煉瓦造りの家屋と家畜小屋のすべてを称して一つのホト（設営集団）を成している。先の世帯と合わせてホトアイルという呼び方もある。このホトという語は小長谷も指摘しているようにシリンホトやフフホトといった市名にも認められる（小長谷 1991 28-29頁）。管見に及ぶ限りホトという語を原義に遡って説明されるものはない。いずれにせよモンゴルの社会集団を考える上では重要な概念と考えられ、今後の課題としたい。
- (9) モンゴルにおいて家畜は財産そのものである。元来野生であった動物を家畜化する方法として去勢は生み出されてきた。小長谷はそれを「去勢畜文化」と呼ぶ。つまり生業システムとならしむる為に、その方法はそれぞれの家畜の種類によって異なるのはもちろんのこと、その生態を知り尽くした技術によっておこなわれるという（小長谷 1996 61-95頁）。中でも興味深いのは、その去勢に儀礼がともなうことで、婚姻儀礼に際し、新婦が婿方のゲルの前でバガナと

呼ばれる棒によって進入を遮られる儀礼がある。最終的にはそれを跨ぎ越すことで、新たな成員として認められるのであるが、去勢が終了した家畜にもそのバガナを跨ぎ越す儀礼があるという。小長谷はこの符合を「家産への受容」とする。しかし家畜を家産と見なすのであれば、去勢を必要としないメスが新たに生み出す家産＝子の場合はどうなるのであろうか。そして何よりも様々な生産物をもたらすメスそのものの家産としての意味が理解されない。

3. 冬支度の始まり

甘酸っぱいような夏の残り香を、秋の爽やかな風が何処かへと運び去った。天空はどこまでも澄みわたり、長閑な秋の日は駆け足で過ぎ去っていく。ほどなくやって来る、刺すような冷たさをともなった冬への備えが、人々の心に広がり始めた。いつも通り一足早く起きた妻は、ゲルのトルガ（五徳）に火を熾した。ゲルの中が暖まってきた頃、主は起きてゲルを出ると、アイアガ（椀）一杯の水で顔を洗い、口を漱いだ。朝の洗面を終え草原を見渡す彼の背中に、北から吹く風が肌寒さを伝えていた。そしてトルガの決まった席に戻ると朝のスーティチャイ（牛乳茶）が出され、朝餉が始まった。

素早く朝餉を取り終えた妻と娘は牛の乳搾りを始めた。この頃になると馬に続いて牛の乳搾りも毎朝のことではなくなる。牛乳が桶一杯になるのにいつもより少し余計に時間がかかり、それでもなんとか終えると、保存用の大きな陶器製の甕に足された。そして乳搾りを終えた牛から順に少しでも長く草を喰わせるため、枯れ草の残る草地へ放牧にだす。

乳搾りを終えた女達は次に三日ほど甕にねかせた牛乳を木綿の袋に入れると、二人一組でそれぞれ端から絞り始めた。袋の中に残った絞り滓を木杵で固め、それを馬の尻尾の毛で切り分け、ボルガス（柳）の細枝で編んだ笊に並べていく。弱まる陽光に当て、乾燥した空気に晒されて作られるホロート（乾酪）は、冬の準備には欠かすことの出来ないものである⁽¹⁾。ホロート作りに精を出す女達は手慣れた手つきでそれを次々とこなして

いった。

そして簡単な昼を済ますと直に、女達は背負い籠を片手に草原へと出かけていった。草原の彼方此方に落ちているアラガル（牛糞）を拾い上げると、器用に背中の籠へと投げ入れていく。籠一杯にたまったアラガルは荷車に移され、それを何度も何度も繰り返す。冬の間の燃料を集めていった。二人は手を休めず草原をくまなく歩き回って夕方までには荷車一杯のアラガルが集められた。

男達は手分けをして、草刈りを行う。この時期小春日和は長く続かず、冷たい雨が降る合間を縫うように、草を刈り入れていく。柄の長い草刈り鎌でなぎ倒すように草を払い、刈り取った草は抱えきれぬほどの大きさに束ねられていく。やがて見渡す限りの草原に草の束が幾つも積み重ねられていった。その手を休め、主が遠くを眺めるように語りだした。「あれは、何年の事だったか。丁度僕がおまえ達くらい歳の頃だったか。このシリングルに酷いゾド（雪害）がやってきて、マル（家畜）が随分とやられた。昔は今よりもずっと寒い日が多くて、同じアイルの年寄りが言うには毛皮一枚分は余計にいるほどに寒かった。ゾドはな、草原に大雪が降った後に酷い寒さがやってきて、地面が皆凍りついてしまうんだ。どんな窪地でも、北に山を背負っても、一面凍りついてしまう。何日もそれが融けないどころか、雪混じりの北風はどんどん強まり、終わることが無いように思われた。草原ではマルが草喰みができずに餓死して、それを拾いに行こうにもゲルからでられず、ただただ神に祈るだけだった。今年は大丈夫だ。これだけ乾し草があれば、マルも無事に冬を越すだろう。」

厳しい寒さの続く冬の間であっても、元気なマルには決して乾し草を与えることはない。乾し草は病気になった家畜にしか与えられない。そして草も伸びぬ春先、家畜たちの出産の際には産まれた仔牛や仔羊などの寝床に敷かれる。マルは自力で枯れ草を喰み、必死に生きてきた。永い間、苛酷な環境の中で自然の淘汰にうち勝った強いものだけが生きることを許される⁽²⁾。いつの間にか長く伸びた影のその先で、残された枯れ草を懸命に喰む牛の姿があった。あとはシベ（囲い柵）に乾し草を運び込めば、その備えは整う。

ゲルの裾を冷たい風が巻き上げ始めると、人々は厚地のデールに衣替えする。かつてはその上にもう一枚皮を纏った上着を着るようになった頃、ウブルヂュー（冬营地）へ向けて、ナムルジャ（秋营地）を出発したという⁽¹⁾。ウブルヂューはナムルジャより風当たりの少ない、南向きの窪地で、周りにハイラス（楡）もあって、何よりボラク（枯れない泉）があり、真冬でも飲水には困ることがない、厳しい冬を迎えるに相応しい場所であった。その地を選んだのは先々代であった。毎年決まった場所には、ゲルの後が今も残るやも知れない。幌の中に次々と家財道具が積み込まれ、大切な食料品も荷車に積まれ、最後にエスギを剥いでゲルが畳まれた。すべての片づけが済むと、何一つ聞こえぬ静寂の世界に響き渡ったであろう車輪の軋む音も、今は懐かしい思い出となっている。

【註】

- (1) いずれも原資である「肉」そのものには手をつけることは抑制され、可能な限り乳が用いられるため、乳製品の種類は豊富である。しかもその個体利用は徹底し、血・肉・毛・鬣・皮・骨・腱・糞に至るまで利用される。
- (2) 春先に天候の激変が頻発するこのゾドと呼ばれる雪害と猛烈な暴風が吹き荒れることがあり、時には百万単位で家畜の大量瀕死をまねく。それから守るために乾し草は大切に保管される。
- (3) モンゴルの遊牧は夏营地と冬营地を交互に根拠地とする。元来、群をなして移動する有蹄類動物の本能として季節的移動は認められたというが、夏营地は水場と植生に恵まれた、高みで風通しの良い、乾燥した場所を選び、冬营地は北西の季節風をさげ、北に斜面を背負う日溜まりのような場所を選ぶことを原則としたという。

まとめ

モンゴルでは超自然的な有翼の馬の存在が考えられてきた。英雄叙事詩に登場するゲセルの兄、ジャサ＝シヘルの馬が有翼の馬として描かれ、百八の胸骨、百八の駆け方、百八の走り方を知って

いると記され、モンゴルの馬は特に翼が有ると表現されなくても、空を飛翔するものと考えられている。このように日本でもよく知られるモリントゴロイト＝ホール（馬の頭のある壺琴）や「スーホの白い馬」（大塚勇三再話 赤羽末吉画、福音館書店、1967年）も同様に、モンゴルの生活文化に馬が大きく関わってきたことを理解させてくれるものである。また、シャマンの用いる馬杖も、シャマンが天界へ行く時の道具として用いられると考えられている。ちなみにこの杖は先輩シャマンを葬った神聖な場所に生える樹木から取ってきた木が使われている。同じく精神世界での馬の意味は、チベット仏教で用いられる祈禱旗（チベット語ではタルチョク、ルンタ）であるヒーモリに描かれる馬をみても明らかである。モンゴル語でヒーとは風、モリは馬。すなわち「風の馬」の意味である。ちなみに月の初めと15日、あるいは婚礼などにはヒーモリを立てる。特に正月15日をモンゴルでは「ヒーモリを広げる日」とも言う。また天の神の依り代と考えられるオボ（土や石による堆積物：塚）にもヒーモリは差し込まれる。

今回の調査を通じてモンゴルの文化的枠組みをみると、内陸アジアの遊牧騎馬民族に連なる伝統的文化に連なる騎馬技術や物質文化が、今日多様な変化を見せる牧民の生活にも伝承されていることが確認できる。また一方で、かつては必ず男性の手によって造られたアイラグが、今日では女性の手によることが多くなるなど、一部に変化は認められるものの、神聖な儀礼において欠く事の出来ないものという性格は今も変わりはない。そして神聖であるが故に、その年の最初の搾乳によって得られた馬乳は、今年も主の手によって天と地の神に捧げるために撒き散らされる。始まりに際してこのような儀礼が伴えば、その終わりに際しても同様の考え方による儀礼が存在することは、いわば当然のことと言えよう。それは決して曆の上に定刻される祭祀ではないが、初物を手にした時、それを神に捧げ感謝する心意は、今も変わることなく伝承されているのである。

最後にこの調査に協力して下さい、惜しみない援助と多大なる教えを賜った多くの友人と馬飼いの一家に心からの御礼を申し上げる次第である。

＝主要参考文献＝

- 内田吟風・田村実造編 1971 【騎馬民族史— 正史北狄伝】東洋文庫、平凡社
小長谷有紀 1985 【モンゴルの春】河出書房新社
同 1991 【モンゴル万華鏡】角川書店
同 1996 【モンゴル草原の生活世界】朝日新聞社
錫林郭勒盟政協文史資料工作委员会・烏蘭察布盟政協文史資料工作委员会編 1989
【察哈尔蒙 古族史話】烏蘭察布盟政協文史資料工作委员会
錫林浩特市地名委員会編 1996 【錫林浩特市地名志】錫林浩特市地名委員会
錫林郭勒盟統計局編 1990-96 【錫林郭勒統計年鑑】錫林郭勒盟統計局
野沢延行 1991 【モンゴルの馬と遊牧民】原書房
原山 焯 1995 【モンゴルの神話と伝説】東方書店
マルコ・ポーロ 愛宕松男訳注 1970
【東方見聞録 I】東洋文庫158、平凡社